



TITLE:

総合討論

AUTHOR(S):

山本, 博之; 平野, 美佐; 西, 芳実; 王, 柳蘭; 星川, 圭介;
帯谷, 知可; 幡谷, 則子; ... 谷川, 竜一; 河合, 英次; 貴
志, 俊彦

CITATION:

山本, 博之 ...[et al]. 総合討論. CIAS discussion paper No.50 : 世界のジャ
スティス --地域の揺らぎが未来を照らす-- 2015, 50: 51-59

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228621>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

移民をめぐる、当事者から政府までを含めて様々な角度から論じられましたが、私自身はそれに対して満足のいかない面がありました。私の事例でいえば、タイに住む中国系ムスリム、すなわち複数の文化を背負った人々は複数の暦で生活リズムを打っていますので、イスラーム的な暦の時間にそった文化―生態的なリズムのみならずえ、タイや中国的など、様々なリズムのなかで彼らは生きています。その複数のリズムが文化と結びつきながら体のなかで打っている。研究してはじめて気がつきましたが、これは非常に豊かなことです。特に興味深いことは、お互いのリズムが毎回毎回対立しているのではなく、特定のリズムのときに、そこに皆、同調していくのを見ることができることです。私自身はムスリムではないので、イスラームという、過激とか、すごく狭い範囲での規律を言っているといった思い込みが研究前にはあったのですが、調査をはじめ彼らのリズムのなかに入っていくと、自分も彼らと一緒にご飯を食べたりすることで彼らのリズムに同調していく瞬間が、年に何回かありました。こうしたことに着目するだけでも、正義とか正義ではないとかという議論を越えたものが、見えてくるのではないかと考えています。

星川圭介（地域研）

まず河合先生の、日本から技術援助が必要ではないかという話ですが、日本からの技術援助というのは、実際もう入っています。今ある地方で進んでいる治水計画の大枠は、JICA と現地政府の各機関が関わって作ったもので、JICA が多くの技術的提言を行っています。

次に幡谷先生から、災害に対しての正義というのは、人々の幸福という観点から見て複数の存在しえない、1つになるのではないかというコメントをいただきました。おっしゃるとおりで、私自身正義というキーワードをかぶせてしまったので、ややわかりにくい話になってしまったとは思っています。例えばバンコクを守るために、周囲の住民を犠牲にすることは許されるのかと言え、それは明らかにNOであって、正義ではないわけです。とはいえ現実的には、それが「正義」としてタイ社会のなかでまかり通っていることも事実です。そんなある部分を犠牲にせざるを得ない状況が正義かどうかと言ったら、もちろんそうではない。バンコクの住民も外の住民も等しく水害から逃れて、衛生的な生活を送る権利がある。これが正義であると、私も思います。

今日申し上げたかったことは、そうした理想を巡る対立ではなく、現実問題として、バンコクに影響があるかどうかという科学的見解をめぐる対立があったということです。むしろ土嚢を壊した人々も、理念的な正義というか完全な平等の実現までは求めておらず、もし土嚢を壊せばバンコクのなかに非常に大きな影響が及ぶと思っていれば、おそらく土嚢の破壊までには及ばなかったのではないか、ということです。

帯谷知可（地域研）：

私は、正義というものが非常に声高に主張される国を研究対象としております。しかしいつも、そうした点がとても危ういような気がして、一步引きたくなる思いでフィールドに通っています。そのため、門司先生から、正義をあまり主張しないほうがいいのではないかというコメントがありましたけれども、その点は私も大変共感しております。

総合討論

山本博之（司会、地域研）：

総合討論を始めるにあたって、議論の方向性をはっきりさせるために、3名のコメンテーターからいただいたコメントを私なりの関心から少し整理してみたいと思います。

やや乱雑な言い方になりますが、あえて大胆に翻訳してみると次のようになります。結局のところ、地域研究者は何でもかんでも相対化してしまう。違うものが出てくると、その間を取ってみて、何とか両方が納得するような方法はないですかと尋ねて、折り合いをつけさせて決着を付けさせようとしてばかりいる。でも、それでいいのか。世の中には絶対的な正義があるのではないのか。あれも正義これも正義と、言葉の上で正義だ正義だ



と言っているけれど、そうじゃなくて、世の中には本当の正義があるんじゃないのか。

この問いを、河合先生は「相対化できない正義はあるんですか」という形で直接問いかけました。幡谷先生はもっと力強く、明言はしていませんが、普遍の正義はあるんじゃないのかという言い方で本当の正義があるはずだという思いを示唆していて、そのことを追究するのが研究の意義ではないのかと呼びかけているように私には聞こえました。

こういう考えにどう応じるのか。普遍の正義あるいは絶対の正義なんて存在しないと言い切ってしまうのが1つの態度だと思います。その一方で、絶対の正義があるのかないかを議論しているだけでは現実の問題は解決しないので、その問題は棚上げにしておいて、多様な立場や考え方がある状況で折り合いをつける作法や技術を1つ1つ積み重ねていくことの方が大事で、そのことを、「正義」と呼ぶことに抵抗があるとしたら「ジャスティス」と呼んでしまおう。そう考えると、むしろこれこそ今の時代のジャスティスなのではないか。それは新しいジャスティスだし、希望のジャスティスなのだ。というのが谷川さんの趣旨説明のメッセージかと思いました。門司先生のコメントは、普遍的な正義はある、あるいは少なくともそれを探る努力をするべきだというお話に聞こえましたが、コメントの最後であり正義を主張しない方がいいとおっしゃっているので、むしろ折り合う作法、つまりここで言うジャスティスの方に近いのかなと思いました。

もしかしらまったく的を外れたまとめ方かもしれませんが、それについては後でコメンテーターの先生方を含めてご議論いただくことにして、まずは5名の報告者に、今の私の言葉を半分参考にさせていただきながら、改めて発言していただきたいと思います。もう一度まとめますと、絶対の正義は確かにあると考えていて、それについてお話しいただくのもけっこうですし、いろいろな立場や考え方がある状況でどのように折り合いをつけるのかということがジャスティスだという趣旨にのっとってお話しいただくか、それともどちらでもないのか。お話しする用意ができた方からでけっこうです。

平野美佐：

正義というテーマで深く議論したわけではないので、このテーマとこの発表の内容であれば、皆さんちょっと混乱されたかもしれません。私たち

のやっている地域は、国際的に見ると、「絶対的な」正義を振り回す側じゃなくて、どちらかと言うと、正義を押しつけられて振り回されてきた側だと思うんです。アフリカだと、西洋近代からいろいろなものを押しつけられるなかで、正義もそのなかに含まれていたと思います。そういう絶対的な正義を押しつけられるなかで、彼らはどちらかと言うと、それとは直接対決しないで、そのフレームのなかで、自分たちのできることをごちゃごちゃやっていくというかたちをとってきた。絶対的な正義が、私はあるのかないかちょっとわからないですけども、そこにローカルな人たちが直接挑むということは、あまりなかった。外から、あるいは上から下りて来る正義と、ローカルな価値観が対立するなかで、中途半端でも両方を取っていくといった戦略が、私がフィールドで見たことでした。それがこのワークショップのテーマであるジャスティスとどこまで重なるかは分かりませんが、私としてはやはりそこが面白いなと思います。ただし、単なるローカルな事例に留めることなく、もっと大きな枠組みで考える必要があると思います。

西芳実：

今の司会の山本さんのまとめ方でいくのであれば、私は後者と言いますか、絶対的な正義というのは追求しない方の立場になると思います。逆の言い方をすると、本当の正義があったとして、それで幸せになるのは一体どこの誰なの、という質問に、どこまで答えられるだろうかと思うからです。正しいか正しくないかということも大切なのですが、現場を同じくする人たちの間で、まあこれで行こうかと、それぞれがそれなりに納得することが大事なんじゃないかと思うんです。次の行動に移れるような状況を作るうえでは、正しきで納得することもありますけれども、必ずしもそうでないこともある。2人の人がいたときに、それぞれ納得してるいけれど、同じものを見て納得していなくても、うまく一緒に仕事ができるということは往々にしてあるわけです。そうしたそれぞれの現場で、次の一步に踏み出すための枠組みとか関係を作るといふことの積み重ねのなかで、何とかうまくいくという方法を考えたいというのが私の立場です。

一方で先ほど門司先生から、今のような話でいけば、いろんな地域の事例がたくさん積み重ねられるだけで、それぞれの地域の人にとってしか意味がないのではないか、というご質問がありまし

た。私自身は、経験や事例というのは、その人自身についての固有の話であることは間違いないんですが、一方で、世界の人、ほかの地域の人たちが直面している共通の課題もそこに潜在しているように思うんです。課題の乗り越え方そのものは、それぞれの現場の人たちが身を削って考えて、責任を持ってそれを引き受けるということの積み重ねなので、それぞれ違うということはあると思いますが、翻ってそういう状況に陥っている状況そのものは、時代や地域の広がりの中で共有されているように思います。現在であれば、グローバル化や情報化が進んで、外から直にいろんな思想や文物がやって来てしまう。しかも、専門家による翻訳を経ずに、それぞれの人が独自の解釈をする、外のあの人がこういうことを言っているのだから私もこの正しさを掲げるんだ、といった主張をしやすくなっている。こうした状況は、どの地域の人も共通して直面しているのかな、と思います。従って、みんなが共有できる正義を探して、みんながハッピーになるという状況を模索するよりは、個別の人たちが持っている正義の成り立ちとか、運用の仕方の工夫というのを見て、そしてひとまずは小さい範囲だけでも関係する人々が納得できる場所を広げることを考えることが、出発点かなと思っています。

王柳蘭：

発表のなかでも申し上げたことですが、移民問題はイデオロギーや教条主義的な側面、あるいはアイデンティティといった民族意識的な側面がよく取り上げられてきました。私はその反対に、身体や物（ブツ）、今日のお話で言えば食べ物など、そうした身体的なものから、共生とか共存のかたちを見たいと思っています。といいますのも、特に移民社会は脆弱なので、なかで対立したりもめたりすると、移民のコミュニティそのものの持続可能性がなくなってしまうのです。政治的なものが絶えず内部にはびこっていますので、頭で考えたものだけではない持続可能な文化装置を、彼ら自身が編み出してきたと私は思っています。脆弱で不安定な中で共生社会をめざす、その中で食べ物を「食べる」といった身体的な相互行為から見えてくるものは何か、そうした別の視座が必要かなと今思っています。

星川圭介：

自然科学系研究者の端くれとして、正義を考えるということについて、ちょっと述べさせていた

だきたいと思います。自然科学者が正義を声高に言って、正義に合わせるために自分の理論を構築していくということはあってはいけないわけで、自分の主義主張にかかわらず、基本的には科学的知見というものを出していくということになります。でも、そのなかに表には出さないけれども、やはり自分の正義を常に持ち合わせていないといけないのだということは、幡谷先生のご指摘通りです。

自然科学者としていかに災害に対応していくかが問われる際には、私はそんな正しい人間ではありませんけれども、やはり自分のなかに確固たる正義というものがあるべきであって、それが相対化されてはいけないと思います。環境分野の話で言えば、環境には環境倫理というのがあって、それが非常に手に負えないものだということは、皆さんもよくご存じだと思います。たとえば環境を守るために人は死んでいいのか。環境テロリズムみたいなものもあって、そのあたりは、非常に多様で、融和させるのはとても難しい。しかし自分なりの正義というものを持って、それを実現すると言ったらおかしいですけど、いろんな価値観の対立のなかで、取りあえず事実誤認に起因するような対立や開きを、事実を出していくことで埋めていこうとする姿勢が、自然科学者としてのあり方かなと思っています。

帯谷知可：

ソ連という体制がなくなったにもかかわらず、私が研究対象としているところでは、個の自由とか、個の尊重といったことが、なぜもっと実現されないのかという疑問が、私には常にあります

私自身は近現代史をやっていますので、今現在生じていることの問題の専門家というわけではないのですが、歴史的なテーマを研究しているときにもそういう問題に突き当たることがあります。



特に、社会主義的近代化が課題だった1920年代の話と、独立後の国づくりが課題になっている現代の問題や状況は、おのずとリンクするものとして私の前には浮かび上がってくるということがあります。先ほどの山本さんからのお話に対しては、絶対的な正義みたいなものには私は違和感があって、結局それはそのときどきの政権が主張する、限定的な意味での絶対的な正義ではないかという気がしています。そう考えると、本当の正義を求めていくことよりは、相互に折り合いをつける作法を編み出していくことが不可能な社会になっているのはなぜか、というところに自分の関心があるように思います。

山本博之（司会）：

みなさんとも同じような感じでしょうか。絶対的な正義とか本当の正義とか、言い方はいくつかありますが、それを求めていくよりは折り合いのつけ方に関心があるように感じられました。星川さんは、自分なりの正義とか絶対的な正義があるべきというお話でしたが、「正義」の前に「自分なり」という言葉がついていて、しかもそれがすでに「ある」のではなく「あるべき」ということが何度も強調されていたことから考えると、星川さんのいう正義とは世界全体が共有しているものではなくて一人一人のうちにあるべきものということだと思いますので、ほかの報告者と同じような考えを共有しているのかなと思いました。

幡谷則子：

誤解があると困るので付け加えておきますと、私は絶対的な正義があるからそこを主張して、地域研究者はそれを追究しなければならないのだと言ったつもりでは決してありません。特に中南米で紛争のあとの人権侵害であるとか、あるいは一先ほどのアチェのお話とかぶって聞いていたんですが一右派と左派との両方のゲリラがいるところで中立性が保たれなくて、誰にも、命を落とした人のことを追及できないというお話があったのはまさにそのとおりなんだろうと思います。ただそういった状況において、やはり普遍的な価値というのはあるだろうと、そう言ったつもりです。そういう状況においてもなお、何が正義で何が正義でないかというのは、たぶん皆さんすでに共有し認識されているだろうと思うのです。そういう状況に対して「いろいろな正義があるから」、というような解釈は、ちょっと成り立ちにくいという意味で申し上げたつもりです。

門司和彦：

要するに、ある地域で正義の対立、価値観の対立が存在することは当たり前ですね。それをまず理解しないと話にならないから、それをまず一生懸命理解しましょう。そのうえで解決策において、ベターなものがあるべきだし、より普遍的なものがあるべきだという、今のご発言でよろしいですか。要するに、右派と左派が出会って、たとえばどういう解決方法があるか、軍事力だけで全部殺してしまう解決の方法もあれば、もう少し違う解決方法もあって、その解決方法においてはやはり、許される解決方法と許されない解決方法がある。その選択されたものがベスト、絶対的な正義だとは思わないけれど、少なくともその状況においては、ベターな選択は常にある、それはそれぞれの立場から見方が違っているけれど、それまで相対化してしまったら、結局何をやっているんだ、となるだろうと。

幡谷則子：

でもたとえば軍事力を使って解決すべきだという主張をする人がいるのなら、それはやはりその人の主張として、（その人は責任をもって）きちんと主張しなくてはいけない。でもそこでどちらの立場を取るかというのは、個々人が突きつけられた問題であり、そこにある判断基準は、揺るぎないものでなければならぬと私は思っているのです。

会場参加者 A：

幡谷さんの感覚に非常に近いと思いますが、様々な異なる価値があると言われていても、自由な議論、つまり公共圏のようなものが成立しないところの場合、手垢がついているかもしれないけれど、基本的な平等であるとか、デモクラティックな意思決定のシステムであるとか、そういった近代が生みだしてきた基本的なルールが、弱い人にとってはセーフガードに使えるわけです。

そこまで私は相対化したくない。帯谷さんのご発表にもありましたが、女性に対する割礼であるとか、あるいは自分の行動の自由を制限されるようなものに対しては、近代というのはある程度、歯止めをかける普遍的な価値観を育ててきたと思うし、自分はそれを信じています。そして、そのことを信じていることを意識してものを見たいと考えています。インドにはカーストがあって、身分制の非条理がいっぱいあるんですが、そこを最終的に相対化できる雰囲気になったのはそういう

価値観だと思うんです。当事者自身もそれを使って見直してきたということもあります。それを繰り返すかどうかわかりませんが、そこまで外せるかというと、私は無理だと思います。

谷川竜一（地域研）：

企画に関わった私からも、お話をさせていただくと思います。1つは、やはり議論が正義という言葉にばかり行ってしまいかねないのでは、と当初から懸念していました。正当性の奪い合いといった話や、正義を相対化できるかできないか、正義はあるかないか、するべきかしないべきか、といった話になってしまう。ですから最初は、テーマを価値観にしようかと考えましたが、そうすると、世界にはこんなものもある、あんなものもあるといった、事例紹介で終わってしまいそうで、それはちょっといやだなと思いました。

私自身が工学系出身だからこう考えるのかもしれませんが、ある価値観と、それに対立する価値観、並列する価値観があって、私たちはそのなかから日々選び取っているわけです。しかも、それを選び取る際にはその背後にもう一つ大きな価値観がある。そうするとエンドレスな相対化のドミノ運動のような中に入ってしまう。だとすればむしろ、価値観と選び取らせようとする動機のようなものも一緒にひっくるめて議論する場を作ったほうがいいかなと思って、この場を設定しました。

「正義」と言ってしまうと、正義は絶対にある、という話になってしまうので、それだけに終わらずに、正義同士を調和していくような手法そのものを議論したい、と。どこまでが地域的に独自な問題であり、それに対する解決方法なのか、そしてどこからが、より大きな広がりの中で共有できる問題なのか、あるいはそれを解決できる英知の部分なのか、議論できればいいな、と思っていました。対象地域と少し距離を持ちながら、同時にそこにちょっと入りながら、そのさじ加減が非常に難しいと思ったんですけれども。

幡谷先生も面白いとおっしゃっていましたが、今日の王さんのお話にありましたように、食べ物という具体的なものの上で調整していく様子は大変興味深く感じました。正義の話題に偏るよりはむしろ、そのあたりの手法のような話、そこへの可能性を私たちがどう共有できるか、といった議論をしたほうがいい、というのが僕の意見です。

会場参加者 B：

ジャスティスの話とイコールではないかもしれ

ませんが、西欧諸国の多くの国では政教分離しながらも、宗教ってかなり価値観などに影響があると思います。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの政教分離、それぞれ全部違って、その中ではフランスが一番徹底していて、ほかの国はあまり分離しているとは明確に言えない状態だと思うんです。まあそれでいいってことでやっていて、それぞれの国に理由がある。だから西洋型のモデルが一枚岩であるとは思わないほうがいいとも思っています。

さきほどインドと中央アジアの比較の話もありましたが、1930年代のトルコは非常に明確な政教分離を打ち出して、徹底的に宗教組織を解体して、政府の統制下に置きました。ソ連政府もそれに近い政策を展開したと思います。帯谷さんのお話は、今、中央アジアではまた揺り戻しのようなことになって、個人が選択しているのかどうか非常に危ういということでした。これもいろんな政教関係があり得るなかでの選択の話として理解したらいいのかなと思いながら、今日話を聞かせていただきました。

会場参加者 C：

多様な正義があることも正義であって、その解決方法が正義であるかどうかをどう担保するかというのは、その地域の人たちが納得していればある程度良いという考え方があるのかな、と思いました。それでもやはりあるべき正義がある、ないとなってしまうと、なかなかそこは結論が出にくいと思うんです。地域研究者を透明な存在と捉えるか、あるいは、地域に関わっている者と捉えるかによっても違ってくると思うので、皆さんが地域研究者としてどう関わっているのか、一言ずつ聞けたらいいかなと思います。

会場参加者 D：

私がこの会に出席した理由は、みなさんが正義をどのように定義しているのか知りたかったからです。例えば、レジリエンスという言葉がありますが、何らかの外的なインパクトがあった際に、しなやかに対応するという、そういったところにも正義が生まれてくるのかなと思っていました。今日、レジリエンスに近い研究が多いのかなと思いきや、そういう研究もありましたが、意外にそうでない人たちもいらっしまったので、今日は楽しかったです。

会場参加者 E：

私はスペイン政治をやっており、政治学の分野の人間です。正義を政治の場に持ち込んだらろくなことにならないという発想の男なのですが、星川先生に政治と科学はどれくらい関わっているのかということをお聞きしたいです。と言いますのは、星川先生のお話、本当に科学的な議論の対立だったのかなという疑問も得たんです。たぶん、科学者が出てきても、相手の議論は、おまえの議論は非科学的だ、となるのではないかという気がするんです。そうすると、一般的に政治のなかでは、科学というのは、価値中立的でいて、何か答えが出るようなものだと思うのがちなんですが、そういったかたちで科学を持ちこんでしまうと余計に妥協ができなくなるような、余計に相手との距離を広げていくようなものになるのではないかという思いを強くしました。ですから、科学というのは、政治にどれだけ関わっているものか、何かご示唆を与えるようなことがありましたら、教えていただければと思います。

山本博之（司会）：

趣旨説明で希望のジャスティスはどこにあるかという問いかけがあったので、報告者からそれについてお聞きできればと思います。はじめに希望のジャスティスという言葉聞いて、それぞれのご報告を聞きながら、直接的にはどの範囲のどの時代の話をしているのかなと思いました。今日のご報告では言及されなかったかもしれませんが、それぞれのご報告のお話の外側にあるもので、それが登場するとそれとの関係で話が違う様相を示したりすることがあるのかなという関心からです。俗っぽく言うと、それぞれのお話のラスボス（最後の敵）は何かということです。バミレケの話は最後に州知事やフランス語が出てきて、村の外の世界とのつながりが何か重要そうだと匂わせていましたが、その場合、外の世界とどう交錯してどう調整されるのかということです。アチェの場合は国際人道支援報道ですね。北タイの場合は最後にチャイナが出てきていて、中国か、あるいはその外に広がっているグレーターチャイナみたいなものかもしれません。タイの洪水の場合は、日本企業や中央政府や王国が出てきて、その存在も葛藤の要因になっているのではないかという気がします。ウズベキスタンはイスラム過激主義への警戒みたいなものが感じられたんですが、そのことが問題になっている領域や空間の外にも国際関係なのか大国の思惑なのか何かがあって、そのの

ことを意識しているから今日のご報告のようなかたちをとって表れたということがあるのかもしれないと思いました。

そういった外部の要素との調整やその工夫や作法が重要だとすれば、何と何をどう調整するのかという話を含めて、そういった観点から、希望のジャスティスとは何なのか、それはどこにあるのかということについてもお聞かせください。

最後に登壇者のみなさんから一言ずつご発言いただきます。まず3名のコメンテーターの先生方から一言ずついただいてから、それを受けて、そしてこれまでのフロアからの発言を受けて、5名の報告者からまとめの発言をいただきたいと思います。

河合英次：

貴重な議論ありがとうございました。2点だけあります。1点目は、先ほどのコメントの際に、相対化される正義という言葉を使っていました。そのあと、幡谷先生が正義に関する絶対性や普遍性について話もされていて、それを聞きながら考えたのですが、正義はそもそも普遍的な価値を有するものであって、それが相対化されるという言い方が、実は形容矛盾を起こしていて、それが議論を混乱させてしまったかなと思いました。卑近な例で言えば、美人なブスとか、紅の黄色と言ったのと同じで、実は正義は相対化されるものではない。だからその点で言うと、レジティマシーという言葉の使い方のほうが正しかったのかもしれない。そこを、議論を伺っていて反省しました。

もう1点、絶対的な正義があるかないかの議論はまだ頭のなかで整理できていませんが、ぜひこの場でお伺いしておきたかったのは、私は大学では国際関係法を勉強していました。したがって、地域研究とは全然、畑が違うんですが、みなさん、地域研究される際に何を求めて研究されるのでしょうか。今日の最初に、原センター長が今日は方法論の話になるかもしれない話をされていたのが意味深だったんですけども、地域研究をする際に、当然その地域の独自性みたいなものを眼中に入れて議論されるんでしょうけど、そこに普遍性を求めることは果たして可能なのか、どうなのか。あるいはそもそも、求めているのか。自分たちの共通点であるとか、地域研究をされている方々に聞いてみたいと思いました。今日は、ありがとうございました。

幡谷則子：

河合先生にフォローしていただいたので、ちょっと救われた思いですが、絶対的な正義がある、ない、という議論を私はフロアに投げかけたつもりはないんです。やはり正義という言葉を使うのは非常に大変なことだと常々思っているの、今日は私の説明の仕方が悪くて混乱を生じたかもしれませんが、正当性だとか、それに近い意味あいでの議論もずいぶんあったと言いたかった、というのが、私の主たるコメントです。

それともう1つ、フロアからどういったときに正義というものを意識されるかという質問があったんですが、私はやはり逆の場合ですね、非常なる不正義があるときとか、人権蹂躪とか侵害があるとき、そういった問題を見ているときにやはり、正義というものを問題にしたいというふうに考えています。

門司和彦：

先ほどのお話にもありましたが、科学、医学、健康を絶対的な正義だと思って、自分がやっていることを疑わないこと、それ自身が、いかんと思っています。

私は地域の生態系のなかの健康問題を扱っていますが、地域研究が本当にできていると思っていないので、地域研究者は地域の深いことがわかる、重要な人たちだと思っています。さっき西さんがアチェの人を被災者としてだけ捉えてはいけないとおっしゃっていましたが、十分な地域研究がなされないと、途上国の人たちは貧しくて困っている人たちで、彼らを助けることが正義だというステレオタイプな考えを、どんどん強化し、自分のやり方こそが正しいと正当化するなかで、自分を疑うことを知らなくなる。やはり自分を疑うことから、すべてがスタートしないといけないというのが、素人っぽい結論ですが、私の考えです。そういった自分の正義を疑わないと、すべてのことが見えないのではないかなと思っています。

平野美佐：

私は地域研究者ですけど、文化人類学者でもあって、文化相対主義というか、そういったことが骨身に入っているのですが、文化相対主義でいくと、重大な人権侵害や女子割礼とか、そういうものも文化だと言って傍観してしまったということが、文化人類学者の反省となっています。そういう意味での、普遍的な正義はあったほうが良いのではと個人的には思います。私は今日、バミレ

ケの人びとの都市と村の対立と和解のような話をしましたが、山本先生がおっしゃったように、これはたんなるバミレケの内輪もめではなく、その外部から強い影響を受けています。バミレケはさまざまな理由からカメルーンの国内政治では周辺化されていて、政治的にはあまり力を持たせてもらえない。もしもカメルーンで民族紛争が起これば、バミレケはおそらく真っ先にターゲットにされると考えられます。彼らはそういう意味で、どこかで常に危機感を抱いています。都市に出た人たちが故郷の首長制社会を守ろうとする背景には、グローバル化、国内政治などの影響がある、ということをつけ加えたいと思います。

西芳実：

私自身、いつも調査・研究する際、自分がどの意味で当事者であるのか、あるいは、自分が当事者である現場はどこなのかを考えるようにしています。今日のような報告をした1つの原点は、アチェの場合、地域の人たちが、自分たちが外の世界でどんなふうに語られているのか、いつもモニターしているということを、強く認識したからです。

アチェにおける様々な人権侵害を解消するために、民族自決という原則でいくと世界の人たちが支持してくれる状況を踏まえて、アチェでは民族自決を求める運動が大きく拡大していったという側面がありました。でもその結果として、世界の人たちがアチェに関心を向けたときに、アチェ民族が独立するかしないか、あるいは、ここの人たちはアチェ民族なのか、インドネシア民族なのかという質問ばかりが投げかけられるようになった。そのせいで、アチェの人たちは独立するかしないか以外の選択肢を奪われていく、というプロセスがありました。

このように、いろいろなかたちで外から働きかけをするときに、この働きかけの仕方そのものをその地域の人たちがモニターしている現状があります。外の人の働きかけや関心が持つ影響、功罪は大きいと思っています。ですので、いつも意識していることというのは、ある地域について自分が語るときに、その語り方そのものをその地域の人たちがモニターしているということ、地域の人が自分の説明を取り入れていったときに、この地域にとってより良い方向に向かいそうなのか、そうでないのか、ということです。そこを見定めながら、目の前の事象をどう解釈するかを最終的には決めているというところがあるように思います。

王柳蘭：

私の調査地域には、正義より不正義のほうが大きかった冷戦時代を生きてきた多くの人が、中国が政権交代したときに難民として入ってきました。そのときには国連の援助もなく、自分たちで生きていかなければならなかった。つまり、国際社会から切り離されて生きてきた人たちであって、そのなかでは同じ中国人同士の間でも、またムスリム同士でも対立軸は数えきれないほどありました。そういったあふれる正義・不正義のなかで、この50年とか100年、中国系ムスリム移民が異国で持続的に発展してきたのには、どのような知恵があって、どんな想像力があったのか、ということを考えました。私は、彼らが特定の宗教に依存しているながらも、より広い意味での普遍性を逆に包み込むような温かさがあったからだ、ということを教えられました。そこが彼らの生き方の素晴らしいところだと思ひまして、地域研究者としてもその人たちの生き方からそういうことを学べたのはとてもよかったと思います。

星川圭介：

科学がどの程度政治に関わるべきなのか、関わっているのか、というお話でしたが、今までの歴史的経緯を見ますと、ある特定の政権、もしくは政権を支える基盤に都合のいい科学というものが結びついて、政治がなされてきたということが、現実だと思います。環境アセスメントにしても、まず結果ありきとしばしばいわれるところですし、水俣病にしても同じような問題がありました。ですから、今の状況が過渡的なものだと考えれば、科学的見解が多チャンネル化するというのは、権威主義的な体制から前進するという意味では、いいことなのだろうとは思いますが。ただし、そこからどう次につなげていくか、というところが難しい。

1つはいろんな科学的見解があることを政府自身が集約して、その幅のなかで政治判断を選び取っていくことが、確率的といいますか、いろんな意味で正しい判断になってくるのかもしれませんが。ただ、自分の支持基盤に不利な判断をできるのかといったら、たぶんそうはならない。バンコクの問題も、都知事はバンコクに対して一番安全な意見を採用するというかたちで、ああいったことをやったわけですね。彼は、翌年、選挙を控えていましたから、支持基盤にとって一番安全な見解のみを、自分の政策判断に生かすかたちになった。それなら不利益を被る側も、自らに有利な科学的見解を採って対抗するしかありません。それぞれ

の立場や主体が科学的見解を主張するのであれば、迅速・円滑にその調整を行う仕組みを整えていくことが、次善の策というか、多チャンネル化の次のステップなのかもしれません。

帯谷知可：

現在のヴェールの問題については、私自身は必ずしも単純に後戻りとは思っていません。ヒジャーブという新しいスタイルのヴェールの着用を、たとえばイスラーム過激主義のような問題と直結させて、シンボリックに悪いものだと思いつけているのは、むしろその公権力の側なんです。おそらく実際にそのイスラーム・ヴェールを着用するようになった女性は、家族の側からの要請もあると思いますし、当然イスラームと結びついてはいると思うのですが、必ずしも、それだけが理由ではないはずです。ある意味、グローバリゼーションのなかでのイスラーム・ファッションの普及など、ウズベキスタンに入ってきたイスラーム的な経済活動ともおそらく結びついている問題です。ある日、突然イスラーム・ファッションに変えることがかっこいいと、若い女の子たちが思っている節もうかがわれたりもします。ですからいろいろな理由があると思っています。

初めてイスラーム・ファッションの女性たちがたくさん現れた場面でもとてもショックを受けたと、報告のなかでお話しましたが、私自身は、ではそのたくさんいるイスラーム・ヴェールを着けた女性たちのことをいいと思っているのかな、悪いと思っているのかな、と、ずいぶん自分のなかで反芻しました。結論としては、たとえば極端な話、ヴェールを着けたイスラームの信仰の篤い女性知識人が、ウズベキスタンの論壇に登場するような日も、想像できなくはないのではないかと。現地の人たちがそういう道を選び取って、そういう道がひらけたのなら、それはそれなのではないかと私は思います。ただ現実問題として、それはとても難しいことだと思いますけれど。

一方で括弧つきの伝統的な男女観とか家族観とか、ジェンダー観が復活してきていることは事実です。女性たちの置かれた立場や、日常生活のなかのさまざまな小さなことひとつひとつを取ってみても、もう一度近代を考え直さなければいけないのではないかと、それは必ずしも欧米を模倣するもの、ソ連時代のものをそのまま引き継ぐものでもなくともいい。そうした視点で近代の再考が求められているように思います。

山本博之（司会）：

どうもありがとうございました。時間が参りましたので、総合討論はこれにておしまいとさせていただきます。報告者のみなさん、コメンテーターのみなさん、そして会場のみなさん、どうもありがとうございました。

最後に、地域研究統合情報センターの貴志俊彦副センター長に閉会のご挨拶をお願いします。

貴志俊彦（京都大学地域研究統合情報センター・副センター長）

今年度から副センター長に就任しました、貴志でございます。まず5名の先生方、報告者の先生方、ありがとうございました。今日は、グローバル・ジャスティスでもなく、ソーシャル・ジャスティスでもなく、地域という視点からジャスティスを論じられた。そしてその地域の視点からジャスティスがどういうメカニズムによって、どういうダイバシティのリソースがあるかということを解明されたという点で、私は大変興味深く拝聴しました。

次に、3名のコメンテーターの先生、ありがとうございました。コメンテーターの先生方からは、ジャスティスという問題が非常に重要で、多様に捉えられるということが改めて強調されたように思います。今改めて考えれば、ジャスティスという言葉が声高に叫ばれるようになったのは、21世紀になってからだろうと思うんですね。2003年にイラク戦争が起こって以来、10年ほどしかたっていない。言うなれば、21世紀の非常に重要なキーワードは、このジャスティスとは何かということ論じることではないかと、コメンテーターの方のお話を聞きながら考えました。

そして65名の参加者の皆さん、ありがとうございました。今日はカメルーンやインドネシア、タイ、それからウズベキスタンのお話を聞けましたが、さまざまな地域のお話をこういうふうに集約的に聞ける場というのは、実はそんなに多くはないわけですね。そういった場に興味、関心を抱いていただきまして、長い時間ご一緒いただきました皆さんに改めて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。